

日本陸水学会第 79 回大会プログラム

2014 つくば

会期 2014 年 9 月 10 日（水曜日）～13 日（土曜日）

会場 筑波大学キャンパスおよびつくば国際会議場

大会日程

月 日	時 間	行 事	会 場
9 月 10 日（水）	10:00～12:00	幹事会	筑波大学 1E203
	12:00～15:00	和文誌編集委員会	1E204
	12:00～15:00	英文誌編集委員会	1E205
	15:15～18:45	評議員会	1E203
9 月 11 日（木）	9:00～	受付	筑波大学 1D2 階
	9:30～12:00	課題講演 1	1E303
	9:30～12:00	一般講演、優秀講演賞審査	1D201, 1D204
	12:30～13:00	ランチョンセミナー1、2	1D201,1D204
	13:00～16:00	課題講演 2	1D201
	13:00～16:00	一般講演、優秀講演賞審査	1D204, 1E203
	16:30～	自由集会 1	1E303
9 月 12 日（金）	8:30～12:30	エキスカーション(霞ヶ浦)	つくばセンター集合
	9:00～	受付	筑波大学
	9:30～16:00	一般講演	1D201, 1D204
	13:00～13:30	ランチョンセミナー3、4	1D201,1D204
	13:30～16:00	課題講演	1D204
	16:30～	自由集会 2	1E303
9 月 13 日（土）	9:00～	受付	つくば国際会議場
	9:15～12:15	公開シンポジウム I	1 F 多目的ホール
	10:00～15:30	ポスターセッション	1 F 大会議室 102
	11:30～13:30	ポスター・コアタイム	1 F 大会議室 102
	12:30～15:00	公開シンポジウム II	1 F 多目的ホール
	15:00～16:00	学会賞授与式、	1 F 多目的ホール
	16:00～18:30	総会	1 F 多目的ホール
	18:30～21:00	懇親会	1 F 大会議室 101

A 会場（筑波大学 1D201）、B 会場（筑波大学 1D204）

C 会場（筑波大学 1E203）、D 会場（筑波大学 1E303）

日本陸水学会第 79 回大会（つくば大会）JLIM79 実行委員会 （国立環境研究所

生物・生態系環境研究センター内〒305-8506 茨城県つくば市小野川 16-2）

大会長 相崎守弘、実行委員長 野原精一（E-mail: snohara@nies.go.jp）

大会案内

1. 受付

- ・受付は9月11日（火）午前9:00から筑波大学1D棟2階で行います。
- ・当日参加費は一般会員7,000円、学生会員4,000円、一般非会員8,000円、学生非会員4,000円です。
- ・講演要旨集のみの方は5,000円で販売いたします。
- ・受付で名札、講演要旨集をお渡しします。会場内では、必ず名札をつけてください。

2. 一般講演・口頭発表（筑波大学 9月11日、12日）

- ・講演時間は、発表12分、質疑3分の合計15分です。1 鈴10分（予鈴）、2 鈴12分（発表終了）、3 鈴15分（講演終了）を鳴らします。
- ・発表では、原則として液晶プロジェクターをご使用ください。液晶プロジェクターはWindowsパソコンに接続しますので、Power PointのファイルをUSBメモリーもしくはCD-Rに保存してお持ちください。ファイルは発表前に発表会場に備えているノートパソコンにご自身でコピー下さい。それ以外の場合は、パソコンやケーブル等をご持参いただき、各自発表の準備をしてください。ご自身のパソコンを接続・復旧する時間、ファイルをコピーする時間も発表時間に含めますのでご注意ください。
- ・優秀講演審査対象セッションは9月11日C会場（1E203）で9:30～12:15、13:00～15:45の時間に行います。詳しくはプログラムをご覧ください。

3. ポスター発表（つくば国際会議場大会議室102 9月13日）

- ・ポスターのパネルの大きさは、縦210cm、横90cmです。
- ・ポスターは13日（土）の9:00から11:00までにご掲示ください。
- ・ポスター発表のコアタイムは、13日（火）の11:30から13:30です。ポスターの発表者は、この時間帯には必ず自分の発表するポスターの前で待機しててください。
- ・ポスター賞対象発表はP-1～P-25、一般発表はP-26～P64です。
- ・ポスターは、13日の16:00までにご撤去ください。なお、ポスター賞に選ばれたポスターは、懇親会の会場に掲示させていただきます。

4. 課題講演

- ・課題講演「陸水生物の分類と生物地理 ―研究の進展と展望―」
コンビナー：野崎健太郎（企画委員、梶山女学園大学）、谷田一三（企画委員、大阪府立大学名誉教授）
会場：筑波大学D会場（1E303）
日時：9月11日木曜日 9:30～12:15

・課題講演「持続可能な地球環境と自然共生社会の実現に向けた統合ラン藻学」の確立に向けて

コンビナー：中野伸一（京都大学）、朴虎東（信州大学）

会場：筑波大学 A 会場（1D201）

日時：9 月 11 日木曜日）13:00～16:00

・課題講演 「陸水環境における放射性物質の挙動」

コンビナー：植田真司（環境科学技術研究所）、野原精一（国立環境研究所）

会場：筑波大学 B 会場（1D204）

5. 公開シンポジウム I・II（つくば国際会議場 多目的ホール 9 月 13 日）

・日本陸水学会企画委員会主催公開シンポジウム I 「環境教育と陸水学～善悪を超えて」

コンビナー：浦部美佐子（滋賀県立大学）・野崎健太郎（椙山女学園大学）

会場：つくば国際会議場 多目的ホール（9 月 13 日土曜日）9:00-12:30

・日本陸水学会 2014 年 つくば大会 公開シンポジウム II

「貯水池化された霞ヶ浦の 50 年」ー霞ヶ浦の水資源開発を世界モデルにするためにはー

コンビナー：相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター長）

会場：つくば国際会議場 多目的ホール（9 月 13 日土曜日）13:00-15:30

6. 自由集会

・自由集会「新しいツールを使って大規模に、効率的に研究を進めよう」

世話人：鎌内宏光（金沢大学・臨海）

会場：筑波大学（1E303）D 会場

日時：9 月 11 日木曜日 16:00～

・自由集会 「陸水物理研究会」

世話人：谷口智雅（三重大学）

会場：筑波大学（1E303）D 会場

日時：9 月 12 日金曜日 16:00～

7. 機器展示

・9 月 11 日（木）～12 日（金） 9:00～16:00 筑波大学 1 E 棟 2 階にて開催します。

※機器展示会場内に、環境ブックフェアとカフェレストコーナーを設置してあります。

8. ランチョンセミナー

今回は日本陸水学会の初めての試みで企業によるランチョンセミナーを開催します。

・ランチョンセミナー1

9 月 11 日木曜日 12:30-13:00、A 会場 （1D201）

「水圏における懸濁態粒子の粒径分布の現地測定」 鷺見栄一

提供：(株)イーエムエス

・ランチョンセミナー2

9月11日木曜日 12:30-13:00、B会場（1D204）

「新型機器のご紹介」

提供：ワイエスアイ・ナノテック(株)

・ランチョンセミナー3

9月12日金曜日 12:30-13:00、A会場（1D201）

「中海窪地における貧酸素水塊の挙動」～汽水域向け移動型水質鉛直計測システムの開発

提供：環境システム(株) 鮎川和泰

・ランチョンセミナー4

9月12日金曜日 13:00-13:30、B会場（1D204）、提供：筑波大学

「福島事故後の放射性セシウムの陸域から河川への移行」 恩田裕一（筑波大学アイソトープ環境動態研究センター）

8. エクスカーション（霞ヶ浦クルージング）

・エクスカーションは霞ヶ浦（西浦）で2時間のクルージングを行います。無料送迎バス（8:30 出発）はつくばセンター（交番前集合）から土浦港までを往復します。ラクスマリナーのホワイトアイリス号（86名乗船可能）を貸し切り、9月12日午前9:15土浦港マリナーに各自集合し、9:30出港、11:30帰港、つくばセンターに12:00頃戻ります。参加人数が20名以下の場合や、風が10m以上になり安全性が確保できない場合には中止します。

時間	内容
8:00	集合時間、バス到着、点呼
8:15	バス出発
8:50	土浦港到着、トイレ休憩
9:15	乗船
9:30	出港（湖心まで約30分）
移動	霞ヶ浦および国立環境研究所長期モニタリングの紹介 （プレゼン・質疑込20分程度）
10:00	湖心到着 ・観測所見学 ・観測機器デモ（各業者）
10:50	湖心を出発
11:10	自然再生事業地（植生帯）の案内
11:30	帰港
11:50	バス乗車、出発
12:30	つくばセンター
12:45	筑波大学 大会会場

9. 懇親会

・9月13日（土）18:30～21:00 につくば国際会議場 1F 大会議室 101 で開催します。なお、当日の参加も可能ですので、奮ってご参加ください。会費は、一般 6,000 円、学生は 4,000 円です。多数の方の参加をお待ちします。

10. 昼食

- ・昼食は大会期間中、お弁当販売および大学周辺の食堂をご利用ください。
- ・お弁当の販売は民間の販売業者が行います。
- ・ランチョンセミナーでは提供企業による無料の軽食が配布されますが、数に限りがあります。配布は 12:30 から行い先着順です。

11. 休憩室

・休憩室は 1E 棟 1 階テラス、1E 棟 2 階 201, 202、1E 棟 3 階 301,302 の 5 ヶ所にあります。ご休憩、昼食にご利用下さい。飲み物をご用意しています。

12. クローク

・1E 棟 103 にクロークルームを用意しています。荷物等の保管にご利用下さい。ただし、係がおりますが荷物の管理や施錠はいたしませんので、貴重品は置かないようにお願いします。

13. フリーWiFi

・筑波大学のご厚意により、フリーの WiFi がご利用できます。氏名・所属等を登録の上ご利用下さい。数に限りがありますので、詳しくは係にお尋ね下さい。

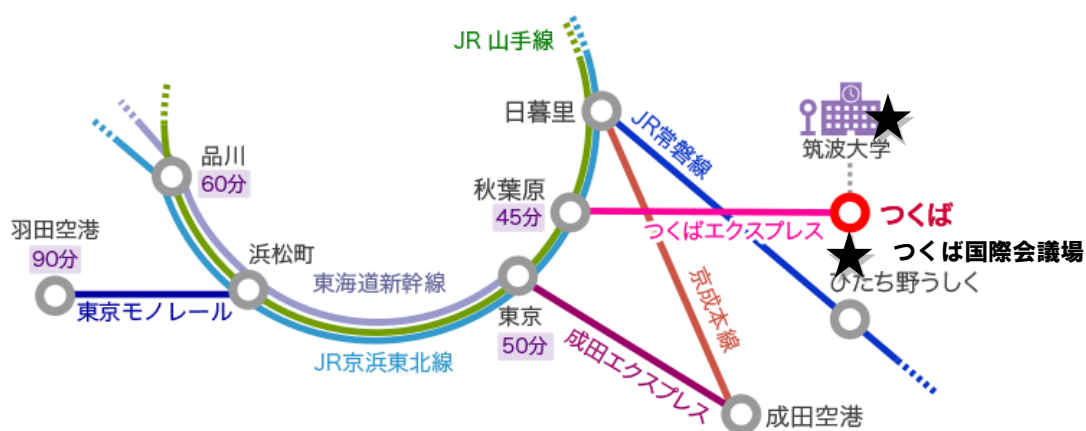
1 4. 大会会場（筑波大学、つくば国際会議場）へのアクセス

1.電車・バスの場合

つくば駅（つくばセンター最寄り駅）まで

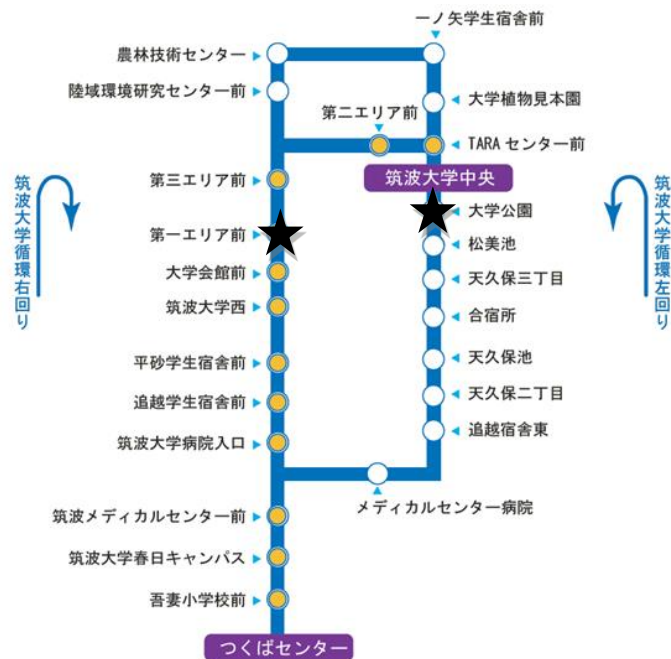
つくばエクスプレスで秋葉原駅から快速（45 分）でつくば駅（つくばセンターの最寄り駅）です。

JR 常磐線ひたち野うしく駅の東口 1 番乗り場から「筑波大学中央」行バスで約 35 分，東口からタクシーで約 25 分です。国際会議場は，最寄り駅のつくば駅及びつくばセンターからバスで約 2 分です。筑波大学は，つくば駅及びつくばセンターから北にやや離れてバスで約 15 分です。



筑波大学会場（9 月 10 日～12 日）

つくばセンターからバスで，バス乗り場は⑥筑波大学方面です。約 15 分の乗車です。筑波大学循環（右回り）は筑波大学中央行**第一エリア前**で下車して下さい。筑波大学循環（左回り）は**大学公園**で下車して下さい。



つくば国際会議場（9月13日）

つくばセンターからバスで乗車約2分、バス乗り場は④で「学園南循環」でつくば国際会議場バス停下車して下さい。つくばセンターからつくば国際会議場まで徒歩8分です。

2. 茨城空港から（つくばセンター～茨城空港線利用＋バス）のご利用の方

茨城空港のWeb (<http://www.ibaraki-airport.net/>)でご確認下さい。「つくばセンター」行バスで約60分です。

3. 東京駅八重洲南口発つくば方面行のバスの場合

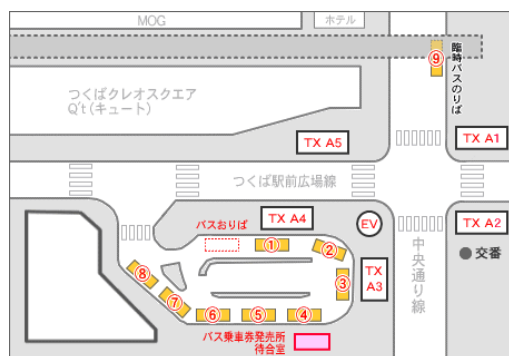
東京駅八重洲南口発つくば方面行のバスには、「筑波大学」行と「つくばセンター」行があります。つくばセンター行はこのバス停が終点です。

筑波大学会場（9月10日～12日）

東京駅八重洲南口から「筑波大学」行き高速バス（約75分）、大学会館前で下車し、会場まで徒歩3分です。

つくば国際会議場（9月13日）

つくばセンターからバスで乗車約2分、バス乗り場は④で「学園南循環」でつくば国際会議場バス停下車して下さい。つくばセンターからつくば国際会議場まで徒歩8分です。



つくばセンターのバス乗り場

4. 自動車の場合

筑波大学会場（9月10日～12日）

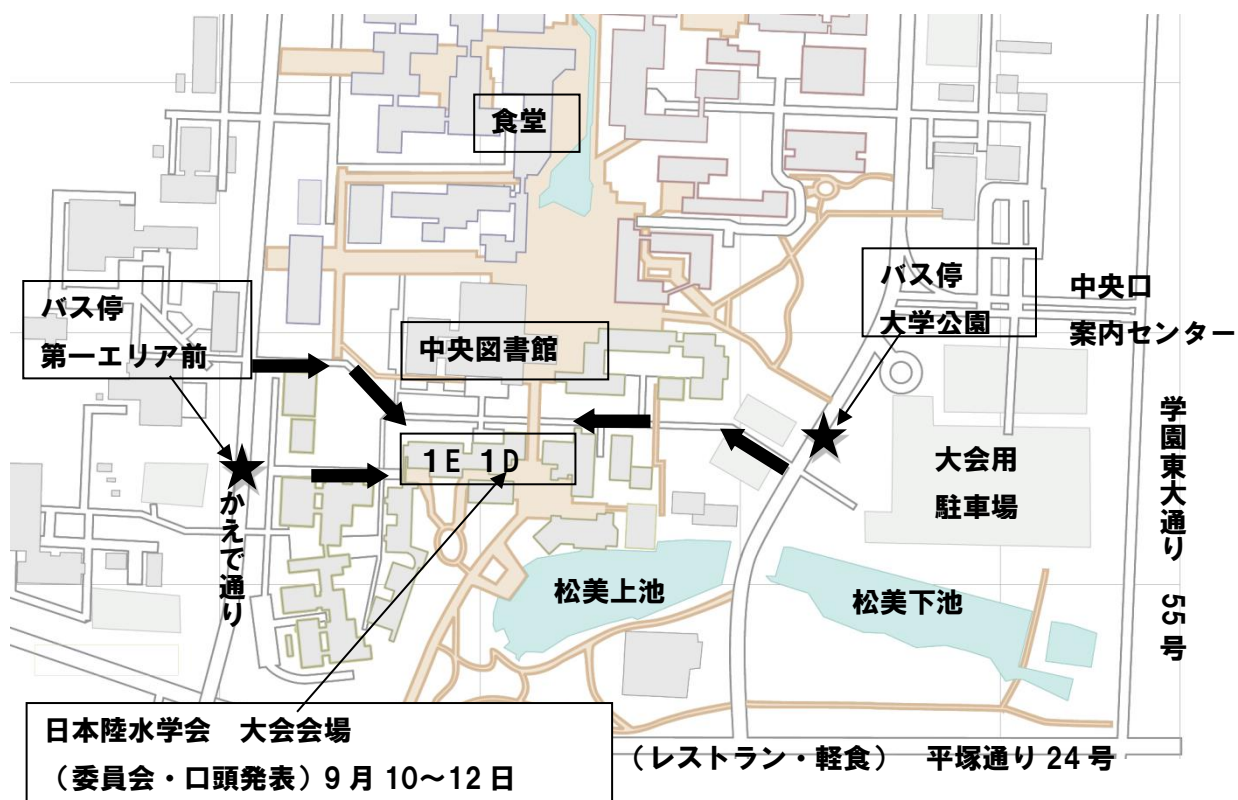
自動車でお越しの際は、筑波大学中央口から入り大会用駐車場をご利用下さい。筑波大学との共催のため学会会期中は無料でご利用頂けます。

つくば国際会議場（9月13日）

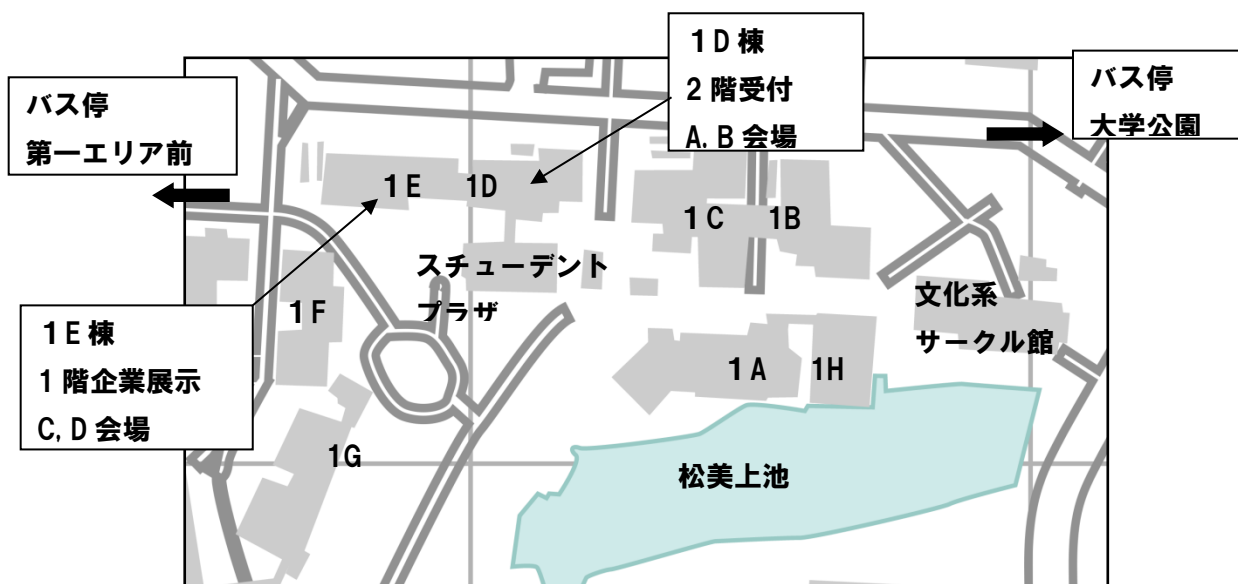
自動車でお越しの際は、有料（一日駐車サービス券で609円）です。詳しくは、つくば国際会議場ホームページ（<http://www.epochal.or.jp/access/>）を参照して下さい。



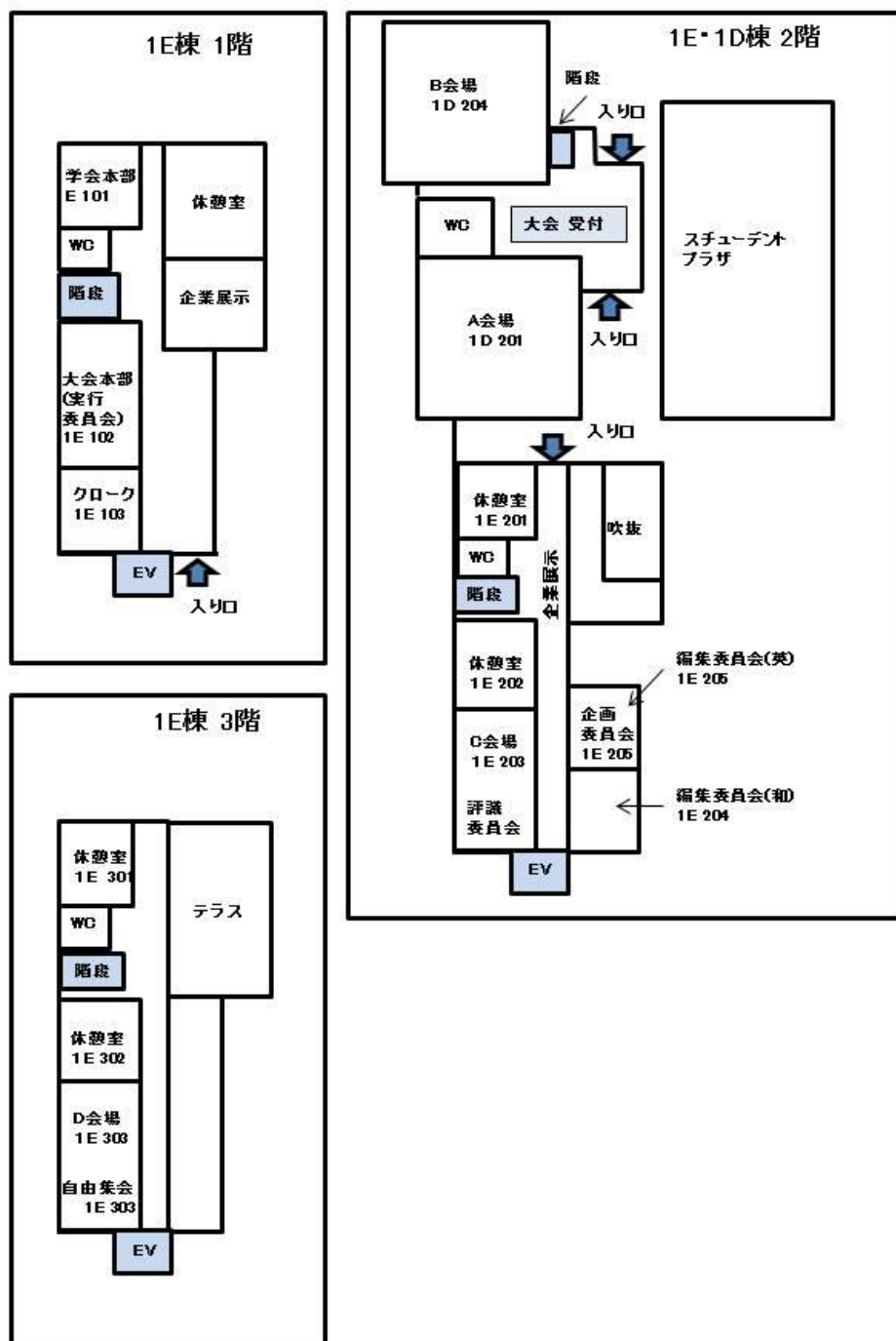
筑波大学とつくば国際会議場の位置



筑波大学会場の案内図 (9月10日~12日)

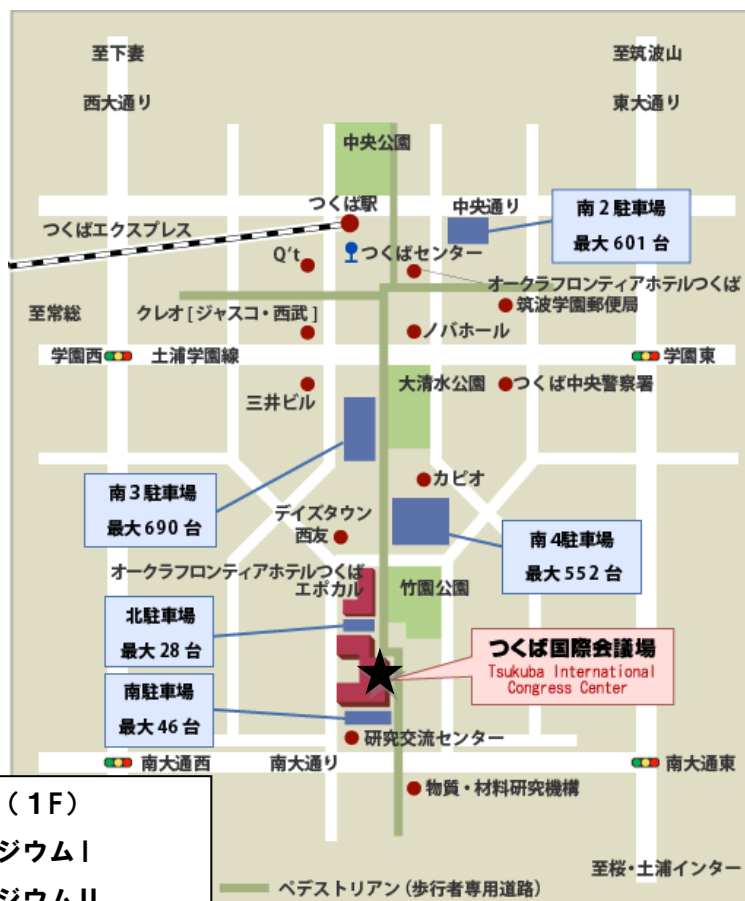


筑波大学会場 (9月10日~12日) 拡大図



日本陸水学会 第 79 回大会（つくば大会） 筑波大学会場案内図

つくば駅からつくば国際会議場まで徒歩 10 分、
 つくば駅 A3 出口を出て、遊歩道を直進およそ 800m。
 つくばセンター（バス終点）から徒歩 8 分。



多目的ホール（1F）
 公開シンポジウムⅠ
 公開シンポジウムⅡ
 学会賞授与式，総会
 9月13日（土）

つくば国際会議場会場案内図



大会議室（1F）
 ポスター発表（102），
 懇親会（101）
 9月13日（土）午後

つくば国際会議場会場案内拡大図（9月13日）

日本陸水学会企画委員会主催公開シンポジウムⅠのご案内

「環境教育と陸水学～善悪を超えて」

開催日時：平成 26 年 9 月 13 日（土）9：15～12：15

開催場所：つくば国際会議場 多目的ホール（1F）

コンビナー：浦部美佐子（滋賀県立大学）・野崎健太郎（梶山女学園大学）

趣旨：

地球温暖化などグローバルスケールでの議論が必要な環境問題が進行する中、わが国では義務教育段階での環境教育へのニーズが高まっている。これに対応して平成 23 年 6 月 15 日に、「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」の改正法である「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」が公布され、平成 24 年 10 月 1 日に完全施行された。しかし主要官庁である環境省・文部科学省ともに、NPO などの民間との連携を強化する一方で、関連する学会との連携は全く視野にいれられていない。さらには改正法自身、環境教育における科学的知見や考え方の重要性について、ほとんど触れられていない。水環境は陸上の環境と異なり、多くの国民にとって見たり感じたりすることが困難な水面下で生じる事象である。このため、いわゆる経験知とされるものが、科学的検証が為されないままに義務教育で教えられている場合も見られる。そこには、EM 菌による水質浄化のような、科学とは言えない例までが教育現場に入り込んでくる余地が生まれている。また、水環境問題は明白に複合的なものであるが、学校教育では「水質浄化」一辺倒になりがちで、近年重要視されている人と自然のかかわりや、生物多様性といった多様な視点から捉える試みはまだ発展途上であると言ってよい。このような状況に対して、陸水学会は、事象を総合的に解析する陸水学的な考え方を環境教育に広めることが必要であると考え。本シンポジウムではこのような観点から、教育現場における科学的かつ総合的な環境教育を目指して、陸水学会がどのような貢献ができるのか、陸水学会は何をすべきかを議論することを目的とした。

講演：

1) 水域における自然再生事業と環境教育

*山室真澄（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

2) 湖をとらえる多様な視点の共有と研究者の役割

*西廣 淳（東邦大学 理学部）

3) 小学校は天動説～自然認識の問題点

*野崎健太郎（梶山女学園大学教育学部）

4) 生物を用いた水質調査の問題点—生物の同定及び水質評価法の基礎的な問題について—

*高島義和（北海道大学理学部）

5) 小中学校での陸水環境の取り上げ方：科学者と教育者の距離は遠いのか？

*石川俊之（滋賀大学教育学部）

6) EM 菌と学校教育

*長野 剛（朝日新聞社 東京本社科学医療部）

日本陸水学会第 79 回大会 公開シンポジウムⅡのご案内

「貯水池化された霞ヶ浦の 50 年」

ー霞ヶ浦の水資源開発を世界モデルにするためにはー

開催日時：平成 26 年 9 月 13 日（土）12：30～15：00

開催場所：つくば国際会議場 多目的ホール（1F）

参加費：入場無料

主催：JLIM79 実行委員会

後援：国土交通省霞ヶ浦河川事務所，茨城県

趣旨：

2013 年は常陸川水門が完成してから 50 年目にあたった。水門は洪水対策及び塩害対策を主とした目的で計画されたが、新たに水資源開発のための水位調節施設としての機能が加わり、霞ヶ浦の水資源開発の主要な施設となった。21 世紀は水の世紀といわれるように淡水資源の確保は世界的な課題である。天然の汽水湖を水門で仕切り、淡水化して貯水池として利用している例は少ない。霞ヶ浦の水資源開発はある面では成功しているが、反面抱えている課題も多い。本シンポジウムでは霞ヶ浦の水資源開発を世界モデルにしていくためには今後どのような点を改善していけばよいのかについて検討する。

講演：

1) 趣旨説明

相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）

2) 淡水資源としての霞ヶ浦の利・活用状況

井上三喜夫（前茨城県霞ヶ浦環境科学センター）

3) 長期モニタリングデータで見えた？

霞ヶ浦(西浦)における水質対策の効果と今後のあり方

小松一弘（(独) 国立環境研究所）

4) 北浦の水質の変遷と今後の課題

神谷航一（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）

5) 動物プランクトンから見た霞ヶ浦の生態系

岩崎順（元茨城県内水面水産試験場）

6) 霞ヶ浦における沿岸性魚類の変化と保全 主にタナゴ類について

萩原富司（(一財) 地球・人間環境フォーラム）

7) 霞ヶ浦における湖岸植生帯の変遷と湖岸植生帯の保全再生にむけた取り組み

傳田正利（(独) 土木研究所）

8) 霞ヶ浦における湖岸景観の変貌と人とのつながりの再生

平井幸弘（駒澤大学）

総合討論

課題講演のご案内

課題講演 1.

「陸水生物の分類と生物地理－研究の進展と展望－」

コンビナー：野崎健太郎（企画委員、梶山女学園大学）、
谷田一三（企画委員、大阪府立大学名誉教授）

会場：筑波大学 D 会場（1E303）

日時：9 月 11 日木曜日 9:30～12:15

内容：

日本陸水学の成長期を支えた上野益三博士や津田松苗博士は、その卓越した形態分類の技術を 1 つの道具として彼ら自身の陸水研究を発展させてきた。このように古くから陸水研究の手法の 1 つであった分類学やそれを活用した生物地理学は、遺伝子の塩基配列決定技術の急速な進展、顕微鏡の高度化によって再び脚光を浴びているが、研究の進展の速さからその成果が十分に知れ渡っているとは言えない。本課題講演では、遺伝子および形態の両面から陸水生物の分類学・生物地理学の今を議論する場としたい。

講演：

- 1) 研究手法としての陸水生物の分類と生物地理（趣旨説明）
*野崎健太郎（企画委員、梶山女学園大学教育学部）
- 2) 淡水湖沼における真菌類の多様性～微量 DNA 分析技術による解明～
*石田聖二・野崎大貴・福田有里・鏡味麻衣子（東邦大学理学部生命圏環境科学科）
- 3) 珪藻の分類学の発展と日本固有種
*辻彰洋（国立科学博物館植物研究部）
- 4) 甲殻類プランクトンの地理的構造を形成した歴史的プロセス
*石田聖二（東邦大学理学部生命圏環境科学科）
- 5) 水生昆虫類における遺伝子解析を用いた最近の分類学的状況
*東城幸治（信州大学理学部生物科学科）、関根一希（高麗大学）、鈴木智也（信州大学山岳科学研究所）
- 6) 分子マーカーを用いた水生昆虫類・魚類における系統地理学
*斎藤梨絵（信州大学大学院総合工学系）、新井谷梨鈴（東京大学新領域）、小林建介・東城幸治（信州大学理学部生物科学科）
- 7) 植物プランクトン分類の発展と応用利用の調和（ダム湖のチェックリスト作成）
*辻彰洋・新山優子（国立科学博物館植物研究部）、一柳英隆（水源地環境センター）、高村典子（国立環境研究所）
- 8) 分類技術者の視点でみた淡水動物分類学の現状
*谷田一三（企画委員、大阪府立大学理学系研究科、大阪自然史センター、豊田市矢作川研究所）、鳥居高明（いであ株式会社、環境創造研究所）
- 9) DNA バーコーディングを適用したユスリカ科昆虫の多様性研究－公開データベースの

構築一

*高村健二・上野隆平・今藤夏子（国立環境研究所）、平林公男（信州大学）、河合幸一郎（広島大学）

10) 日本産河川昆虫類の系統分類学・生物地理学の歴史と展望

*谷田一三（企画委員，大阪府立大学理学系研究科，大阪自然史センター，豊田市矢作川研究所）

課題講演 2.

「持続可能な地球環境と自然共生社会の実現に向けた統合ラン藻学」の確立に向けて

日時： 9月11日（木曜日）13:00－16:00

会場：筑波大学 A会場（1D201）

コンビナー：中野伸一（京都大学）、朴虎東（信州大学）

趣旨：

趣旨：

我が国では、高度経済成長期以降に多くの環境問題が起こった。湖沼では富栄養化が深刻化し、多くの湖ではアオコが発生した。アオコは、シアノバクテリアが大量に増殖したものである。シアノバクテリアの中には、大発生すると景観を損ね、悪臭を放ち、さらに悪いことには人体にも有害な毒を生産することもある。淡水で大発生するシアノバクテリアは、多くの場合はミクロキスティスであるが、湖沼によってはアナベナやシネココッカスなども大発生することもある。また、海洋ではリングビアなどのシアノバクテリアが大発生する。これらのため、いわゆる「アオコ問題」は、シアノバクテリア全般について言及すべきものと考えられる。

我が国ではこれまでに多くの研究者が、シアノバクテリアの系統地理分布・発生機構の解明やシアノバクテリア大増殖の防除対策の研究を進め、また近年ではシアノバクテリアから有用物質を取り出す研究も進められている。すなわち、現在の我が国では、シアノバクテリアについて多様で奥深い研究がなされるようになり、日本の淡水・海水におけるシアノバクテリア研究は1980年代から現在まで、世界でトップクラスのレベルにある。また、シアノバクテリアの大発生は、世界各地で普遍的に見られる環境問題であり、大発生に伴う経済的損失や産業構造の変化、さらには周辺住民の生活との関わりなどの、人文・社会科学の研究も行われている。

しかし、研究が多様化かつ深化した結果、シアノバクテリア研究の専門化・細分化が進み、お互いの間の横方向でのつながりは希薄となっている。例えば、分類関係は藻類学会、生態関係は陸水学会、防除対策等は水環境学会など、細分化された研究テーマはそれぞれに主な発表の場を違えている。各々の専門に限られた情報交換の中では、新しい研究のアイデアや技術の更新が得られにくく、我が国のシアノバクテリア研究のさらなる発展に少

なからず影響があることは否定できない。さらには、シアノバクテリア研究の専門化・細分化は、一般社会にも負の作用を及ぼしている。例えば、湖沼にアオコが発生してしまった場合にどうするか？については、短・中・長期的対応において様々な専門家のアドバイスを必要とする。が、すでに細分化され分散しているアオコ研究者の中から適当な研究者を見つけ出し、彼らから体系的なアドバイスを集めることは難しいのが現状である。

水圏生態系においてシアノバクテリアが引き起こす環境問題の解決、さらにはシアノバクテリアを有用転換する技術について、我が国が世界のリーダーシップを取れる研究を展開し、さらにこれによって人類の福祉・健康に貢献するために、シアノバクテリアを同じ土俵の上で多様な学術的アプローチから議論するプラット・フォームを構築することが、喫緊の課題である。

近年、超学際（transdisciplinary）研究と称される研究手法が注目されている。シアノバクテリア問題は、社会の様々な階層のステークホルダーが関わる問題であり、研究者側でも多様な分野からの研究者の協力が必要となる。今般、シアノバクテリアの研究で、「統合ラン藻学」と称した新学術領域を提案する。ここで「ラン藻」とは、淡水および海水の浮遊性あるいは付着性のシアノバクテリアの古い呼び名である。我が国ではこの呼称が定着しているため、本提案では「ラン藻」を使うこととする。我々は、「統合ラン藻学」を新たに確立し、研究者側の学際性を担保することによって研究者間の横のつながりを強化し、新たな研究のアイデア発掘と技術革新を効率良く進めながらシアノバクテリアに関わる研究全般の発展を図りたい。「統合ラン藻学」では、さまざまな環境要因に対するアオコの生理生態学的反応を解明し、これら環境要因の複合効果に対するアオコの生理生態学的応答モデルを構築する。これにより、世界各地でおこるさまざまな水の華に効率良く対応し、さらにはアオコによる有用物質の効率良い生産のための、学術的基盤を確立する。

講演：

- 1) 「持続可能な地球環境と自然共生社会の実現に向けた統合ラン藻学」の確立に向けて
中野伸一
- 2) リモートセンシングによるアオコの観測
*尾山洋一・松下文経・神谷航一・福島武彦（筑波大）
- 3) シアノバクテリアの進化とクロロフィルの多様化
*宮下英明（京都大・地球環境）、大久保智司（現埼玉大・理工）、神川龍馬（京都大、地球環境）
- 4) 化学反応速度論による藍藻類 *Microcystis aeruginosa* の鉄摂取機構解明
藤井学（東京工業大学）
- 5) 概日時計遺伝子構成の多様性に見るシアノバクテリア時計タンパク質機能変化
*小山時隆、北川徳明、廣田周平、浅野宏幸（京都大学大学院）
- 6) 諫早湾調整池におけるアオコの優占種変遷に関わる環境要因
*梅原亮・高橋徹・河田仁・富岡典子・小森田智大・折田亮・竹中理佐・堤裕昭

7) ラン藻、Microcystis の生活環解明のための化学生態学的アプローチ

*原田健一、Beata Bober、有井鈴江（名城大院総術・薬）、富田浩嗣（愛知衛研）、辻清美（神奈川衛研）

8) 陸水生態系におけるアオコ毒の動態解析

朴虎東（信州大・理）

9) アオコがつくる 2 次代謝産物の構造多様性

*沖野龍文（北大院地球環境）、Andrea Roxanne J. Anas（名城大学・薬）

10) 湖沼の有機汚濁負荷源としての小型シアノバクテリアの重要性

*岸本直之（龍谷大）、山本千尋（龍谷大院）、鈴木恵（日本分析化学専門学校）、一瀬諭（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）

11) 水草・ヨシ・殺藻細菌：環境にやさしい有毒アオコの発生抑制技法の探求

*今井一郎（北大・水産）、宮下洋平・小島千里・扇 航平（北大・水産）、城戸 祐・木原一樹・晏 栄軍（京都大）農）

課題講演 3.

「陸水環境における放射性物質の挙動」

日時： 9 月 12 日（金）13:00-16:30

会場：筑波大学 B 会場（1D204）

コンビナー：植田真司（環境科学技術研究所）・野原精一（国立環境研究所）

趣旨：

2011 年 3 月に東京電力福島第一原子力発電所事故から放出された放射性物質は地表面や植物等に沈着し、降雨などのイベントに伴い徐々に流域内を降下している。河川水を通じた放射性セシウムの移動は、水田などの水を用いた農作物への影響、山林などからの放射性セシウムの拡散状況の把握、河川底質や河口付近への放射性セシウムの移動などの環境動態評価が重要となる。また、水中の放射性 Cs は主に溶存態と懸濁態で存在しており、その挙動が異なると予想される。そこで、陸水環境での懸濁粒子の挙動、沈殿量の季節変化、流量観測と放射性物質の挙動、河口域湿地に洪水時に流れ込んだ放射性物質の分布、植生の蓄積量、底生動物の生物相と放射性物質の蓄積量を定量的に明らかにすることを陸水学者に求められている。各地の陸水における環境放射能研究で得られた結果について総合的に考察し、今後地元の環境改善に還元して行く方法について議論する。

講演：

1) 福島事故後の放射性セシウムの陸域から河川への移行

恩田裕一（筑波大学アイソトープ環境動態研究センター）

2) 福島県郡山市と浪江町における放射性セシウムの大気中濃度と降下量の季節変化

*長谷川英尚・落合伸也・柿内秀樹・植田真司・久松俊一（環境科学技術研究所）、

赤田尚史（核融合科学研究所）、奥山克彦（日本大学工学部）、床次眞司（弘前大学）、反町篤行（福島県立医大）

3) 陸域に沈着した放射性セシウムの川からの流出

*植田眞司・長谷川英尚・柿内秀樹・大塚良仁・久松俊一（環境科学技術研究所）、赤田尚史（核融合科学研究所）

4) 霞ヶ浦における放射性セシウムの分布と動態

*荒居 博之・福島 武彦・恩田 裕一（筑波大学）

5) 福島第一原子力発電所事故による群馬県赤城大沼の放射性セシウム汚染 ―放射性 Cs の物質収支―

*角田欣一・相澤省一・森 勝伸・齋藤陽一・小崎大輔・小池優子・阿部隼司（群馬大学）、鈴木究真・久下敏宏・泉庄太郎・田中英樹・小野関由美（群馬県水産試験場）、野原精一（国立環境研究所）、葉袋佳孝（武蔵大学）、岡田往子（東京都市大学）、長尾誠也（金沢大学）

6) 福島第一原子力発電所事故による群馬県赤城大沼の放射性セシウム汚染 ―水生生物の汚染状況―

*鈴木究真・久下敏宏・泉庄太郎・田中英樹・小野関由美（群馬県水産試験場）、角田欣一・相澤省一・森勝伸・齋藤陽一・小崎大輔・小池優子・阿部隼司（群馬大学）、野原精一（国立環境研究所）、葉袋佳孝（武蔵大学）、岡田往子（東京都市大学）、長尾誠也（金沢大学）

7) 中禅寺湖周辺河川における水生生物の汚染状況について

*吉村真由美（森林総合研究所）、横塚哲也（栃木県水産試験場）、赤間亮夫（森林総合研究所）

8) 湿地生態系における放射性セシウムの挙動

*野原精一（国立環境研究所）

9) 大気―陸域―湖沼モデルを結合した放射性物質の琵琶湖水質への影響予測

*佐藤祐一・園 正（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、山中直（元：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、小松英司（筑波大学大学院）、上原浩・湯浅岳史（パシフィックコンサルタンツ）、永禮英明（岡山大学大学院）

10) 総合討論

第一日目（9月11日木曜日）午前

開始時間	A 会場 （1D201）
9:30	1A01 溪流水量と溶存成分濃度の関係を利用した、間伐に伴う土壌中成分の鉛直分布変化の推定 小島永裕（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、長井正博・兵頭恒太・片山幸士（人間環境大学）
9:45	1A02 流域規模と流域内水田面積増減による水田施用農薬の流出傾向 川村裕紀（キョーワ株式会社）、海老瀬潜一（摂南大学）
10:00	1A03 筑波山の溪流水中 NO_3^- 濃度に及ぼす針葉樹林率の影響 渡邊未来・三浦真吾・仁科一哉・高松武次郎・高津文人・今井章雄・越川昌美・林誠二（国立環境研究所）
10:15	1A04 窒素飽和状態にある筑波山における溪流水中 Ca 濃度の長期比較 越川昌美・渡邊未来・錦織達啓・渡邊圭司（国立環境研究所）、高松武次郎（国立環境研究所）、中野孝教（総合地球環境学研究所）、林誠二（国立環境研究所）
10:30	（休憩）
10:45	1A05 栃木県鹿沼地域における森林環境と溪流水質について 金田治彦（栃木県保健環境センター）、荻原香大（栃木県県西環境森林事務所）、渡邊未来（国立環境研究所）、柏矢倉大介（栃木県都市整備課）、菅沼好一・三浦真吾（国立環境研究所）、大森 牧子（栃木県保健環境センター）、林誠二（国立環境研究所）
11:00	1A06 円錐形状山系の放射状流下溪流の水質方位分布特性 海老瀬潜一（摂南大学）
11:15	1A07 屋久島一湊川における降雨初期 CDOM 挙動の考察 鮎川和泰（環境システム株式会社）、北渕浩之・吉田明史（滋賀県立大学）、田辺雅博（日科機バイオス株式会社）、横田久里子（豊橋技術科学大学）、永淵修（滋賀県立大学）
11:30	
12:30	ランチョンセミナー 1 「水圏における懸濁態粒子の粒径分布の現地測定」 鷺見栄一 提供：(株)イーエムエス

第一日目（9月11日木曜日）午前

開始時間	B会場（1D204） 琵琶湖・微生物・プランクトン・魚類
9:30	1B01 琵琶湖水から分離した <i>Bosea</i> sp.(BIWAKO-01 株) を用いたメタロゲニウム粒子の生成環境について 古田世子・一瀬諭・藤原直樹（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、宮田直幸（秋田県立大学）
9:45	1B02 琵琶湖深水層における植物プランクトン生物量に対する <i>Synechococcus</i> の寄与 高巢裕之（東京大学）、潮雅之（龍谷大学）、Jessica LeClair・中野伸一（京都大学）
10:00	1B03 琵琶湖沿岸帯における底生動物群集の構造と食物網のエネルギーフロー 荏部甚一（茨城大学）、武山智博（岡山理科大学）、酒井陽一郎・奥田昇・陀安一郎・由水千景（京都大学）、高津文人（国立環境研究所）、永田俊（東京大学）
10:15	1B04 湖沼の浮遊性細菌群集による有機リン代謝と好氣的メタン生成 岩田智也・小林あい・内藤あずさ（山梨大学）、小島久弥（北海道大学）
10:30	1B05 琵琶湖流入河川における付着藻類量と環境因子の関係分析 大久保卓也（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、石崎大介（滋賀県水産試験場）
10:45	(休憩)
11:00	1B06 発生段階の異なるメダカのカイロモンがダフニア属に与える影響について 平尾旭（信州大学）
11:15	1B07 湖沼に流入した花粉はツボカビを介してミジンコに利用されるのか？ 鏡味麻衣子・本木安倫（東邦大学）、Alexandra Bec (Université Blaise Pascal)
11:30	1B08 魚の情報化学物質がミジンコに与える影響 高橋祥尚・花里孝幸（信州大学）
11:45	1B09 琵琶湖産ミジンコ(<i>Daphnia pulicaria</i>)の餌に対する応答実験 *一瀬諭・古田世子・奥居紳也・藤原直樹（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
12:00	1B10 諏訪湖におけるワカサギ仔魚の生態について 君島祥・花里孝幸（信州大学）
12:15	
12:30	ランチョンセミナー2 「新型機器のご紹介」提供：ワイエスアイ・ナノテック(株)

第一日目（9月11日木曜日）午前

開始時間	C 会場 （1E203） 優秀講演賞審査対象セッション
9:30	1C01 宍道湖における植物プランクトンの含有する色素と ω -3 不飽和脂肪酸について 嵯峨友樹（島根県保健環境科学研究所）
9:45	1C02 淡水湖沼環境で優占する硫黄酸化細菌の特定とゲノム解析 渡邊友浩・小島久弥・福井学（北海道大学）
10:00	1C03 浅い部分循環湖深層における主要な硫酸還元菌の特定 久保響子・小島久弥・福井学（北海道大学低温科学研究所）
10:15	1C04 河川付着藻類のクロロフィル炭素・窒素安定同位体比・放射性炭素 14 天然存在比測定 石川尚人・菅寿美・小川奈々子（海洋研究開発機構）、山根雅子・宮入陽介・横山祐典（東京大学）、大河内直彦（海洋研究開発機構）
10:30	1C05 屋久島一湊川における付着藻類の消長 北渕浩之・吉田明史・永淵修（滋賀県立大学）、横田久里子（豊橋技術科学大学）、手塚賢至（屋久島生物多様性保全協議会）、鮎川和泰（環境システム株式会社）、田辺雅博（日科機バイオス株式会社）
10:45	（休憩）
11:00	1C06 酸化マグネシウム添加が藍藻細胞と藍藻毒素 Microcystin 動態に及ぼす影響 萩原美晴・朴虎東（信州大学）
11:15	1C07 霞ヶ浦における <i>Planktothrix</i> の長期的な変動と光環境の関係 中村剛也・相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
11:30	1C08 浮葉植物の有無が動物プランクトン群集のハビタット利用に関わるか *伊藤和輝・花里孝幸（信州大学）
11:45	1C09 湖岸移行帯における昆虫・クモ類の抽水・浮葉植物利用の季節変化 中西奈津美（東邦大学）、高木俊（兵庫県立人と自然の博物館）、西廣淳・鏡味麻衣子（東邦大学）
12:00	1C10 集水域の土地利用が琵琶湖沿岸域のベントス群集の多様性に与える影響 酒井陽一郎（京都大学）、荻部甚一（茨城大学）、柴田淳也（広島大学）、武山智博（岡山理科大学）、陀安一郎・谷内茂雄・中野伸一・奥田昇（京都大学）

第一日目（9月11日木曜日）午前

開始時間	D会場（1E303）課題講演 「陸水生物の分類と生物地理 ―研究の進展と展望―」
9:30	1D01 研究手法としての陸水生物の分類と生物地理（趣旨説明） *野崎健太郎（企画委員，梶山女学園大学教育学部）
9:45	1D02 淡水湖沼における真菌類の多様性～微量DNA分析技術による解明～ *石田聖二・野崎大貴・福田有里・鏡味麻衣子（東邦大学理学部）
10:00	1D03 珪藻の分類学の発展と日本固有種 *辻彰洋（国立科学博物館植物研究部）
10:15	1D04 甲殻類プランクトンの地理的構造を形成した歴史的プロセス *石田聖二（東邦大学理学部）
10:30	1D05 水生昆虫類における遺伝子解析を用いた最近の分類学的状況 *東城幸治（信州大学理学部）、関根一希（高麗大学）、鈴木智也（信州大学山岳科学研究所）
10:45	（休憩）
11:00	1D06 分子マーカーを用いた水生昆虫類・魚類における系統地理学 *斎藤梨絵（信州大学大学院総合工学系）、新井谷梨鈴（東京大学新領域）、小林建介・東城幸治（信州大学理学部）
11:15	1D07 植物プランクトン分類の発展と応用利用の調和（ダム湖のチェックリスト作成） *辻彰洋・新山優子（国立科学博物館植物研究部）、一柳英隆（水源地環境センター）、高村典子（国立環境研究所）
11:30	1D08 分類技術者の視点でみた淡水動物分類学の現状 *谷田一三（企画委員，大阪府立大学，大阪自然史センター，豊田市矢作川研究所）、鳥居高明（いであ株式会社）
11:45	1D09 DNAバーコーディングを適用したユスリカ科昆虫の多様性研究―公開データベースの構築― 高村健二・上野隆平・今藤夏子（国立環境研究所）、平林公男（信州大学）、河合幸一郎（広島大学）
12:00	1D10 日本産河川昆虫類の系統分類学・生物地理学の歴史と展望 *谷田一三（大阪府立大学）

第一日目（9月11日木曜日）午後

開始時間	A会場（1D201） 課題講演 「持続可能な地球環境と自然共生社会の実現に向けた統合ラン藻学」 の確立に向けて
13:00	1A08 「持続可能な地球環境と自然共生社会の実現に向けた統合ラン藻学」 の確立に向けて 中野伸一（京都大学）
13:15	1A09 リモートセンシングによるアオコの観測 *尾山洋一・松下文経・神谷航一・福島武彦（筑波大）
13:30	1A10 シアノバクテリアの進化とクロロフィルの多様化 *宮下英明（京都大・地球環境）、大久保智司（現埼玉大・理工）、神川龍馬（京 都大，地球環境）
13:45	1A11 化学反応速度論による藍藻類 <i>Microcystis aeruginosa</i> の鉄摂取機構解 明 藤井学（東京工業大学）
14:00	1A12 シアノバクテリアの概日時計因子構成の多様性と配列変化 *小山時隆、北川徳明、浅野宏幸（京都大学）
14:15	1A13 諫早湾調整池におけるアオコの優占種変遷に関わる環境要因 *梅原亮・高橋徹・河田仁・富岡典子・小森田智大・折田亮・竹中理佐・堤裕 昭
14:30	（休憩）
14:45	1A14 ラン藻、 <i>Microcystis</i> の生活環解明のための化学生態学的アプローチ *原田健一、Beata Bober、有井鈴江（名城大院総術・薬）、富田浩嗣（愛知衛 研）、辻 清美（神奈川衛研）
15:00	1A15 陸水生態系におけるアオコ毒の動態解析 朴虎東（信州大理）
15:15	1A16 アオコがつくる2次代謝産物の構造多様性 *沖野龍文（北大院地球環境）、Andrea Roxanne J. Anas（名城大学）
15:30	1A17 湖沼の有機汚濁負荷源としての小型シアノバクテリアの重要性 *岸本直之（龍谷大）、山本千尋（龍谷大院）、鈴木恵（日本分析化学専門学校）、 一瀬諭（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）
15:45	1A18 水草・ヨシ・殺藻細菌：環境にやさしい有毒アオコの発生抑制技法の 探求 *今井一郎（北大・水産）、宮下洋平・小島千里・扇 航平（北大・水産）、城 戸 祐・木原一樹・晏 栄軍（京都大）農）

第一日目（9月11日木曜日）午後

開始時間	B会場（1D204） 汽水域
13:00	1B11 汽水湖湖底堆積物中のパイライトの定量に関する研究 久川諒大・管原庄吾・橋本達矢・江川美千子・清家泰（島根大学）
13:15	1B12 汽水湖宍道湖湖底堆積物中溶存硫化物の変動とヤマトシジミの生息に及ぼす影響に関する研究 西村和晃・管原庄吾・朴紫暎・馬場達也（島根大学）山室真澄（東京大学）、 神谷 宏（島根県保健環境科学研究所）、勢村均（島根県水産技術センター）、江 川美千子・清家泰（島根大学）
13:30	1B13 宍道湖西岸域における水質変動と底質の違いがヤマトシジミの生残と 成長に与える影響 辻谷睦巳（大福工業株式会社）、川上豪・飯塚洋平（NPO 法人自然再生セン ター）、相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
13:45	1B14 由良川下流から河口域における基礎生産 安佛かおり・舟橋達宏・石井健一郎・笠井亮秀・上野正博・山下洋（京都大 学）
14:00	1B15 港湾域の埋立地周辺および航路の貧酸素化特性 藤井智康（奈良教育大学）、藤原建紀（京都大学名誉教授）
14:15	
14:30	
14:45	
15:00	
15:15	
15:30	
15:45	

第一日目（9月11日木曜日）午後

開始時間	C 会場 （1E203） 優秀講演賞審査対象セッション
13:00	1C11 琵琶湖における大地震前後の静振(Seiche)について 岩木真穂（京都大学）、熊谷道夫（立命館大学）
13:15	1C12 蔵王山の火山湖および温泉における 129I/127I 比の分布 *松中哲也・笹公和・末木介・高橋 努・松村万寿美・佐藤志彦（筑波大学）、
13:30	松崎浩之（東京大学）、後藤章夫・渡邊隆広・土屋範芳・平野伸夫（（東北大学）、 木崎彰久（秋田大学）
	1C13 西の湖における水質の長期変動とその要因 奥村浩気・浅見正人（滋賀県東近江環境事務所）、佐藤祐一・廣瀬佳則・藤原
13:45	直樹・田中稔（琵琶湖環境科学研究センター）
	1C14 活性アルミナを用いて分離した琵琶湖溶存有機物の化学的特徴 内海理伽（兵庫県立大学）、早川和秀（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、
14:00	藤嶽暢英（神戸大学）、高橋勝利（産業技術総合研究所）、木田森丸・真木謙造 （神戸大学）、熊谷哲（兵庫県立大学）、杉山裕子（兵庫県立大学）
14:15	（休憩）
14:30	1C15 震ヶ浦懸濁物中に含まれる核酸に含まれるリンの動態について 篠原隆一郎・今井章雄・高津文人・富岡典子・佐藤貴之・佐野友春・小松一
	弘・三浦真吾・霜鳥孝一（国立環境研究所）
14:45	1C16 震ヶ浦底泥中のリンと金属元素の関連 霜鳥孝一・今井章雄・渡邊未来・高津文人・小松一弘・佐藤貴之（国立環境
	研究所）、三浦真吾（株式会社 武揚堂）、篠原隆一郎・富岡典子・越川昌美・林
	誠二（国立環境研究所）
15:00	1C17 屋久島一湊川における水質形成について 吉田明史・北渕浩之・永淵修（滋賀県立大学）、横田久里子（豊橋技術科学大
	学）、鮎川和泰（環境システム株式会社）、田辺雅博（日科機バイオス株式会社）、
	手塚賢至（屋久島生物多様性保全協議会）
15:15	1C18 湿原における腐植物質の分解に光と温度が与える影響 盛合哲史・千賀希子（東邦大学）
15:30	1C19 北東シベリア北極圏における湿地生態系の水分環境と窒素動態 *両角友喜・茂厂・新宮原諒・鷹野真也（北大院・環境）、鄭峻介（極地研）、
	Maximov Trofim C.(IBPC SB RAS)、杉本敦子(北大院・地球環境)
15:45	1C20 水生植物由来の殺藻細菌によるアオコ抑制の可能性 *宮下洋平・萩原匠・小島千里・今井一郎（北大院・水産）

第一日目（9月11日木曜日）午後

開始時間	D 会場（1E303）
13:00	
13:15	
13:30	
13:45	
14:00	
14:15	
14:30	
14:45	
15:00	
15:15	
15:30	
15:45	
16:00	自由集会「新しいツールを使って大規模に、効率的に研究を進めよう」 世話人：鎌内宏光（金沢大学・臨海） 1）趣旨説明：鎌内宏光（金沢大・臨海） 2）「Evernote、EndNote、自炊」でペーパーレス：鎌内宏光 3）オープンソース GIS 関連：岩崎亘典（農環研） 4）データベース関連：大澤剛士（農環研） 5）未定（タイトル、発表者とも） 6）総合討論

第二日目（9月12日金曜日）午前

開始時間	A 会場 （1D201） 湖沼の水質・化学・環境 DNA
9:30	2A01 牛久沼の水質について *小日向寿夫・吉尾卓広・桑名美恵子・相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
9:45	2A02 人工湖水・河川水調整法の創案とその特性評価 杉山雅人・呉詩勤・望月陽人・細田耕・堀智孝（京都大学大学院）
10:00	2A03 湖沼深水層の溶存酸素不足量の陸水学的意義再評価と今後の課題 坂本 充（滋賀県立大学・名古屋大学）
10:15	2A04 琵琶湖における新たな有機物管理の考え方について 早川和秀・岡本高弘・五十嵐恵子・古角恵美・廣瀬佳則・一瀬諭・田中稔・（琵琶湖環境科学研究センター）、津田久美子（草津市役所）、清水芳久・中野伸一（京都大学）、藤嶽暢英（神戸大学）、日下部武敏・三崎健太郎（京都大学）、田中仁志（埼玉県環境科学国際センター）杉山裕子（兵庫県立大学）、山田悦（京都工芸繊維大学）、布施泰朗（京都工芸繊維大学）、丸尾雅啓（滋賀県立大学）
10:30	（休憩）
10:45	2A05 布部ダムにおける亜酸化窒素、ヒドロキシルアミン及びヒドラジンの挙動に関する研究 加藤季晋・上野隆雅・引野愛子（島根大学）、増木新吾・戸島邦哲（松江土建株式会社）、管原庄吾・江川美千子・清家 泰（島根大学）
11:00	2A06 手賀沼におけるメタン収支 時枝隆之・谷口雄哉・葛西眞由子・伊波はるな（気象大学校）、中山典子（東京大学）
11:15	2A07 異なる腐植質濃度である高濃度有機炭素含有温泉水の泉質の比較 高野敬志・内野栄治（北海道立衛生研究所）
11:30	2A08 環境 DNA 手法の希少生物種調査への応用：兵庫県下のため池におけるカワバタモロコの分布調査 源利文・福岡有紗（神戸大学）、高原輝彦（広島大学）、（兵庫県立農業高校）
11:45	2A09 集団における外来遺伝子頻度を定量する環境 DNA 手法の開発と野外への適用 内井喜美子（大阪大谷大学）、土居秀幸（広島大）、源利文（神戸大）、山中裕樹（龍谷大学）
12:00	ランチオンセミナー3 「中海窪地における貧酸素水塊の挙動」～汽水域向け移動型水質鉛直計測システムの開発～ 環境システム(株)鮎川和泰
12:30	

第二日目（9月12日金曜日）午前

開始時間	B 会場（1D204） 水生昆虫・カワゴロモ
9:30	2B01 水中亜鉛濃度がヒゲナガカワトビケラ幼虫の造網活動に与える影響 平林公男・山寄健人（信州大学）
9:45	2B02 脂肪酸分析によるヒゲナガカワトビケラの微生物利用評価 赤松史一（酒類総合研究所）、岡野淳一・藤永承平・加藤義和・由水千景・中野伸一・陀安一郎（京都大学）
10:00	2B03 ヒゲナガカワトビケラ属の放射性セシウム汚染のモニタリング-福島県真野川を中心として- 藤野毅・Hnin Wityi・小堀翔太（埼玉大学）、五味高志・境優（東京農工大学）
10:15	2B04 溪流の淵に生息する昆虫のパッチ間移動行動の種間比較ー移入と移出から淵内分布の種間差を説明するー 下村航一・加賀谷隆（東京大学）
10:30	休憩
10:45	2B05 屋久島一湊川におけるカワゴロモの生育制限要因について *横田久里子（豊橋技術科学大学）、北渕浩之・吉田明史（滋賀県立大学）、手塚賢至・手塚田津子（屋久島生物多様性保全協議会）、鮎川和泰（環境システム株式会社）
11:00	2B06 屋久島一湊川におけるカワゴロモが関係する水質変動 *永淵修（滋賀県立大学）、横田久里子（豊橋技術科学大学）、鮎川和泰（環境システム株式会社）、田辺雅博（日科機バイオス）、手塚賢至（屋久島生物多様性協議会）、北渕之・吉田 明史・中澤暦（滋賀県立大学）
11:15	2B07 屋久島一湊川におけるカワゴロモの分布と水温の関係 *手塚賢至（屋久島生物多様性協議会）、永淵修（滋賀県立大学）、横田久里子（豊橋技術科学大学）、鮎川和泰（環境システム株式会社）、田辺雅博（日科機バイオス）
11:30	
11:45	
12:00	

第二日目（9月12日金曜日）午後

開始時間	A 会場 （1D201） リモートセンシング・シアノバクテリア・湿地・水草
13:00	2A10 人工衛星リモートセンシングデータを用いた琵琶湖の湖面環境情報の推定 青田容明・Wells John（立命館大学）
13:15	2A11 霞ヶ浦におけるアオコ発生時の <i>Microcystis aeruginosa</i> の挙動について 富岡典子・今井章雄・小松一弘・高津文人・篠原隆一郎（国立環境研究所）、佐藤貴之（地球・人間環境フォーラム）
13:30	2A12 鉄電解法を用いる農業集落排水のリンの除去に関する研究 久木祐弥（島根大学）
13:45	2A13 水稻2期作の雨期に低収量となる水田の水・土壌環境に関する研究—ベトナム・メコンデルタ地域の事例— *飯泉佳子（国際農研）、近藤始彦（農研機構作物研究所）、渡辺武（国際農研）
14:00	（休憩）
14:15	2A14 ゴルフ場池水の水槽での沈水植物による浄化効果 峯木茂・小林優子・宮繁京・永井茜（東京理科大学理工学部）、吉澤秀治（明星大学理工学部）、深瀬孝一郎（富士化学工業株式会社）
14:30	2A15 Growth and stress response of <i>Nitella</i> to cesium Keerthi Sri Senartahna Atapaththu, Takashi Asaeda and Md Harun Rashid（Saitama University）
14:45	2A16 The combined effects of diverse redox level and ammonium nitrogen concentration on some physiological parameters of <i>Myriophyllum spicatum</i>. Mahfuza Parveen, Takashi Asaeda, Md H. Rashid（Saitama University）
15:00	2A17 Role of Arbuscular mycorrhizal fungi on growth and nutrient content of <i>P. japonica</i> growing on river bank soil Animesh Sarkar, Takashi Asaeda（Saitama University）, Qingyue Wang and Md H. Rashid1（Shahjalal University of Science and Technology, Bangladesh）
15:15	
15:30	

第二日目（9月12日金曜日）午後

開始時間	B会場（1D204） 課題講演 「陸水環境における放射性物質の挙動」
13:00	ランチョンセミナー4 提供：筑波大学 2B08 福島事故後の放射性セシウムの陸域から河川への移行 恩田裕一（筑波大学アイソトープ環境動態研究センター）
13:30	2B09 福島県郡山市と浪江町における放射性セシウムの大気中濃度と降下量の季節変化 *長谷川英尚・落合伸也・柿内秀樹・植田真司・久松俊一（環境科学技術研究所）、赤田尚史（核融合科学研究所）、奥山克彦（日本大学工学部）、床次眞司（弘前大学）、反町篤行（福島県立医大）
13:45	2B10 陸域に沈着した放射性セシウムの川からの流出 *植田真司・長谷川英尚・柿内秀樹・大塚良仁・久松俊一（環境科学技術研究所）、赤田尚史（核融合科学研究所）
14:00	2B11 霞ヶ浦における放射性セシウムの分布と動態 *荒居博之・福島武彦・恩田裕一（筑波大学）
14:15	2B12 福島第一原子力発電所事故による群馬県赤城大沼の放射性セシウム汚染ー放射性Csの物質収支ー *角田欣一・相澤省一・森 勝伸・齋藤陽一・小崎大輔・小池優子・阿部隼司（群馬大学）、鈴木究真・久下敏宏・泉庄太郎・田中英樹・小野関由美（群馬県水産試験場）、野原精一（国立環境研究所）、葉袋佳孝（武蔵大学）、岡田往子（東京都市大学）、長尾誠也（金沢大学）
14:30	2B13 福島第一原子力発電所事故による群馬県赤城大沼の放射性セシウム汚染ー水生生物の汚染状況ー *鈴木究真・久下敏宏・泉庄太郎・田中英樹・小野関由美（群馬県水産試験場）、角田欣一・相澤省一・森勝伸・齋藤陽一・小崎大輔・小池優子・阿部隼司（群馬大学）、野原精一（国立環境研究所）、葉袋佳孝（武蔵大学）、岡田往子（東京都市大学）、長尾誠也（金沢大学）
14:45	(休憩)
15:00	2B14 中禅寺湖周辺河川における水生生物の汚染状況について *吉村真由美（森林総合研究所）、横塚哲也（栃木県水産試験場）、赤間亮夫（森林総合研究所）
15:15	2B15 湿地生態系における放射性セシウムの挙動 *野原精一（国立環境研究所）
15:30	2B16 大気ー陸域ー湖沼モデルを結合した放射性物質の琵琶湖水質への影響予測 *佐藤祐一・園 正（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、山中直（元：滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、小松英司（筑波大学大学院）、上原浩・湯浅岳史（パシフィックコンサルタンツ）、永禮英明（岡山大学大学院）
15:45	総合討論

第二日目（9月12日金曜日）午後

開始時間	D 会場（1E303）
13:00	
13:15	
13:30	
13:45	
14:00	
14:15	
14:30	
14:45	
15:00	
15:15	
15:30	
15:45	
16:00	自由集会 「陸水物理研究会」 世話人：谷口智雅（三重大学）

第三日目（9月13日土曜日）午前

	場所：つくば国際会議場 多目的ホール
	日本陸水学会企画委員会主催公開シンポジウム 「環境教育と陸水学～善悪を超えて」
開始時間	コンビナー： 浦部美佐子（滋賀県立大学）・野崎健太郎（椙山女学園大学）
9:15	3S01 水域における自然再生事業と環境教育 *山室真澄（東京大学大学院新領域創成科学研究科）
9:45	3S02 湖をとらえる多様な視点の共有と研究者の役割 *西廣 淳（東邦大学 理学部）
10:15	3S03 小学校は天動説～自然認識の問題点 *野崎健太郎（椙山女学園大学教育学部）
10:45	3S04 生物を用いた水質調査の問題点—生物の同定及び水質評価法の基礎的な問題について— *高島義和（北海道大学理学部）
11:15	3S05 小中学校での陸水環境の取り上げ方：科学者と教育者の距離は遠いのか？ *石川俊之（滋賀大学教育学部）
11:45	3S06 EM菌と学校教育 *長野 剛（朝日新聞社 東京本社科学医療部）
12:15	
12:45	

第三日目（9月13日土曜日）午後

	場所：つくば国際会議場 多目的ホール
	日本陸水学会 2014年 つくば大会 公開シンポジウム 「貯水池化された霞ヶ浦の50年」 ー霞ヶ浦の水資源開発を世界モデルにするためにはー
開始時間	コンビナー： 相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター長）
12:30	3S07 淡水資源としての霞ヶ浦の利・活用状況 *井上三喜夫（前茨城県霞ヶ浦環境科学センター 副センター長）
12:50	3S08 長期モニタリングデータで見えた？ 霞ヶ浦(西浦)における水質対策の効果と今後のあり方 *小松一弘・今井章雄（国立環境研究所）
13:10	3S09 北浦の水質の変遷と今後の課題 *神谷航一・菅谷 和寿・桑名恵美子・相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
13:30	3S10 動物プランクトンから見た霞ヶ浦の生態系 *岩崎順（茨城県ひたちなか市）
13:50	3S11 霞ヶ浦における沿岸性魚類の変化と保全 主にタナゴ類について *萩原富司（地球・人間環境フォーラム）、松崎慎一郎（国立環境研究所）
14:10	3S12 霞ヶ浦における湖岸植生帯の変遷と湖岸植生帯の保全再生にむけた取り組み *傳田正利・大寄真弓・片桐浩司（独立行政法人土木研究所）
14:30	3S13 霞ヶ浦における湖岸景観の変貌と人とのつながりの再生 *平井幸弘（駒澤大学文学部）
15:00	

ポスター発表（ポスター賞対象発表）

発表番号	演題及び氏名（所属）
P-1	リモートセンシング反射率による湖沼の透明度推定 *川村志満子・福島武彦・松下文経・尾山洋一（筑波大学）
P-2	<i>Chlorella</i> sp.が生産する溶存有機物の特性解析 森朱音・和田憲明・千賀有希子（東邦大学）
P-3	赤城大沼の底質と周辺土壌の放射性 Cs 分布 阿部隼司・相澤省一・森勝伸・佐藤記一・角田欣一（群馬大学）、野原精一（国立環境研究所）、鈴木究真（群馬県水産試験場）
P-4	深見池における全層無酸素層の出現 *登めぐみ・須田ひろ実・大八木麻希（愛知工業大学）、横山亜希子（（株）ウォーターエージェンシー）、岩月栄治・八木明彦（愛知工業大学）
P-5	諏訪湖底質における重金属類濃度の鉛直分布とその変遷 吉田知可(信州大学)、池中良徳（北海道大学）、宮原裕一（信州大学）
P-6	2012 年 9 月に発生した宍道湖における青潮の発生機構 管原庄吾（島根大学）・山室真澄（東京大学）、神谷宏（島根県保健環境科学研究所）、井上徹教（港湾空港技術研究所）、勢村均（島根県水産技術センター）、江川美千子・清家泰（島根大学）
P-7	トゲマダラカゲロウ属幼虫の二次生産に対する栄養基礎 田村繁明・加賀谷隆（東京大学）
P-8	ポンプ法で河川間隙動物組成を偏りなく推定する手法の開発 田中亜季・難波利幸・谷田一三（大阪府立大学）、竹門 康弘（京都大学）
P-9	有機物汚濁が著しい香川県の河川における浮遊藻類の一次生産 福田竜也（愛媛大学）、野崎健太郎（相山女学園大学）、山田佳裕（香川大学）
P-10	野洲川河口から琵琶湖にかけての細菌群集の組成と酵素活性 藤永承平・中野伸一（京都大学）
P-11	印旛沼における珪藻付着性真菌類の形態観察及び遺伝系統解析 野崎大貴・石田聖二・鏡味 麻衣子（東邦大学）

P-12	On the effect of pH of water sample on the recovery rate of environmental DNA 辻冨月・山中裕樹（龍谷大学）
P-13	水系内に広域分布するチラカゲロウの個体群構造と遺伝的構造-2 つの遺伝系統群の検出とそれぞれのハビタット選好性について- 斎藤梨絵・竹中將起・東城幸治（信州大学）
P-14	東アジア産マダラカゲロウ類（昆虫綱・カゲロウ目）における分子系統地理学的研究 趙在翼・東城幸治（信州大学）
P-15	アミノ酸窒素安定同位体比を用いた捕食性魚類の栄養段階推定—栄養起源の混合を考慮して— 加藤義和・奥田昇・由水千景・陀安一郎（京都大学）
P-16	富栄養化した汽水域における沿岸性動物プランクトン群集の季節変化 中野翔・Seo Dong-Il (Kyung Hee University)、Baek Seung-Ho・Jang Min-Ho (Kongju National University)、Choi Jong-Yun (Pusan National University)、Kim Yong-Jae (Daejin University)、Chang Kwang-Hyeon (Kyung Hee University)
P-17	有機物汚濁の著しい河川堆積物表層の酸化還元環境 黒田敬彬・山田佳裕(香川大学)
P-18	湖沼底質採取における異なる採泥器の特性評価：放射性セシウムを指標として 荒居博之・福島武彦（筑波大学）
P-19	底泥厚の異なるコアを用いたリンの溶出実験について 神谷航一・福島武彦（筑波大学）・相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
P-20	高分解能音響イメージングソナーを用いた沈水植物群の分類と 3 次元マッピング手法の検討 水野勝紀・浅田昭（東京大学生産技術研究所）
P-21	霞ヶ浦における光環境の長期的変遷について 中村剛也・相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）
P-22	白駒池に生息する動物プランクトン <i>Acanthodiaptomus pacificus</i> の astaxanthin 特性および食性解析 *根岸永璃子・渡邊琴文、朴虎東（信州大学）
P-23	沖縄県本島羽地内海における河川からの土砂流出による底生生物（有孔虫）への影響 加藤みやび（島根大学）
P-24	半閉鎖性水域の窒素循環における水鳥の寄与の比較 中村雅子(国立環境研究所)

ポスター発表（一般）

発表番号	演題及び氏名（所属）
P-25	陸水域長期モニタリングの利活用推進に向けて～GEMS/Water 事業と摩周湖長期モニタリング 中川恵・田中敦・戸津久美子・松崎慎一郎・高村典子（国立環境研究所）
P-26	水を素材とした ESD と地域理解－陸水環境の温故知新－ 元木理寿（常磐大学）、谷口智雅（三重大学）、大八木英夫（日本大学）、宮岡邦任（三重大学）
P-27	佐久間ダム堆砂問題は解決可能か？ 戸田三津夫（静岡大学）
P-28	山梨県内河川水中における重金属の形態分析について 長谷川裕弥（山梨県衛生環境研究所）
P-29	新潟平野水田地帯の小河川における水質特性、特に鉄及びマンガンの挙動について 土田智宏・小野香南子・鈴木美智子・昆信芳・旗本尚樹（新潟県保健環境科学研究所）
P-30	東北地方の河川における各種安定同位体の空間分布調査（予報）－硝酸イオンの窒素・酸素安定同位体比からみた河川環境 由水千景（京都大学）、申基澈・中野孝教（総合地球環境学研究所）、奥田昇・加藤義和・神松幸弘（京都大学）、栗田豊・富樫博幸・天野洋典（水産総合研究センター）、陀安一郎（京都大学）
P-31	石川流域における POCIS を用いた河川農薬モニタリング 矢吹芳教・相子伸之（大阪府立環境農林水産総合研究所）、永井孝志・稲生圭哉（農業環境技術研究所）
P-32	2013 年 9 月に上陸した台風 18 号による琵琶湖水質への影響について 桐山徳也・田中稔・岡本高弘・七里将一・古角恵美・廣瀬佳則・藤原直樹（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター）、川崎竹志・廣田大輔（滋賀県琵琶湖環境部）、五十嵐恵子（滋賀県南部環境事務所）
P-33	熱分解 GC/MS, FTIR 等を用いた琵琶湖底質フミン物質の特性評価 布施泰朗・山田悦（京都工芸繊維大学）
P-34	震ヶ浦における底質中放射性セシウムの蓄積と挙動 田中敦・林誠二・高津文人・小松一弘・今井章雄（国立環境研究所）、荻部甚一（茨城大学）

P-35	国内外の水道水・ミネラルウォーターの分類と味に貢献する因子の抽出 *池 晶子（羽衣国際大）、川瀬雅也（長浜バイオ大）、山川純次（岡山大）
P-36	地下水が湧出する庄川扇状地の玄手川における水質特性 奥川光治・菊池美里(富山県立大学)
P-37	β-シクロデキストリンを用いたアミノ酸分析 児玉光樹・植野僚・小野田貴光・戸田三津夫（静岡大学）
P-38	大阪湾に流入する河川水および海域に含まれる難分解性有機窒素化合物 相子伸之・矢吹芳教・中島昌紀(環境農林水産総合研究所)、吉田光方子（地球環境戦略研究機関）
P-39	環境水中溶存態ケイ素の定量における分析法の影響 丸尾雅啓・辻衿奈（滋賀県立大学）
P-40	ため池の動物プランクトン群集の規定要因：生産性，生態系サイズ，捕食者に着目した解析 片野泉・名倉明日子・濱野紗耶加(兵庫県立大学)、土居秀幸・高原輝彦（広島大学）源利文（神戸大学）
P-41	Environmental gradients and distribution of freshwater fish in Korean streams Kim Ji-Hyeon・Yoon Ju-Duk・(Kongju National Univ.) Chang Kwang-Hyeon (Kyung Hee Univ.) Jin-Woong Lee・Min-Ho Jang (Kongju National Univ.)
P-42	Efficiency analysis of fishway installed in the Gongju weir in the Geum River, South Korea Lee Jin-Woong・Ji-Hyeon Kim・Yoon Ju-Duk (Kongju National Univ.) 張光玟(慶熙大学)、Min-Ho Jang (Kongju National Univ.)
P-43	1本の葉緑体を持つアオミドロ (<i>Spirogyra</i> sp.) の春の有性生殖と消失ー浜松市三ヶ日町における事例ー 野崎健太郎（相山女学園大学）
P-44	淡水魚類の放射性セシウム減衰過程を決める要因：栄養ポジション，代謝速度，水温 土居秀幸・高原輝彦・田中万也（広島大学）
P-45	コガタシマトビケラの生活史パラメータと室内個体群動態 横山淳史（農業環境技術研究所）

P-46	ヒゲナガカワトビケラの造網による河川底質安定化の地域的な違い 岡野淳一・奥田昇(京都大学)
P-47	琵琶湖における植物プランクトンを介した炭素フロー 後藤直成・田中由佳・(滋賀県立大学)、三田村緒佐武(滋賀大学)
P-48	アユと動物プランクトンの捕食者-被食者関係について 永田貴丸・井上栄壮・木村道徳・大久保卓也(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)
P-49	海浜公園池におけるバイオレメディエーションに向けた生態系構造解析 村上和仁・宮本瞬也・吾妻咲季・林秀明(千葉工業大学)
P-50	鳥屋野潟(新潟県新潟市)における動物プランクトン群集 帆苅信(新潟県立教育センター)、安部信之・伊藤章・富樫繁春・伊藤正一・松本史郎・帆苅信夫(新潟河川生態研究グループ)
P-51	炭素・窒素安定同位体比を用いた浅い富栄養湖伊豆沼における魚類群集の餌資源推定 安野翔(仙台市役所)、藤本泰文・進東健太郎・嶋田哲郎(宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団)、鹿野秀一(東北大学)、菊地永祐(宮城教育大学)
P-52	Interaction among rotifers, cladocerans and copepods in eutrophic system: experimental analysis on their food selection and predation impact in mesocosm Seo Dong-Il (Kyung Hee Univ.)、Choi Jong-Yun (Pusan National University)、Nam Gui-Sook (Korea Rural Community Corporation)、Chang Kwang-Hyeon (Kyung Hee Univ.)
P-53	琵琶湖北湖深水層低酸素化のシナリオについて 焦春萌・桐山徳也・石川可奈子・井上栄壮・永田貴丸(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)
P-54	琵琶湖北湖湖底における溶存酸素濃度変化の空間的な違い: 近江今津沖と近江舞子沖の比較 石川俊之・谷中景太(滋賀大学)
P-55	日本国内の大深度湖沼の水温・水質の鉛直分布と循環 濱田浩美(千葉大学)、大八木英夫(日本大学)、知北和久(北海道大学)、田中敦(国立環境研究所)、牧野晶(北海道大学)、五十嵐聖貴(北海道立総合研究機構)、深澤達矢(北海道大学)、南尚嗣(北見工業大学)、小林拓(山梨大学)、藤江晋(てしかが自然史研究会)

P-56	メコン川流域ダム貯水池における一次生産 広木幹也・富岡典子・福島路生・村田智吉（国立環境研究所）、Jutagate Tuanthong（Ubon Ratchathani Univ.）、今井章雄・小松一弘（国立環境研究所）
P-57	富栄養化水域での微生物群集による難分解性多糖の利用ポテンシャルティ 松田有紀子・日野修次（山形大学）
P-58	低濃度の農薬による湖沼生態系の構造・機能への影響評価 坂本正樹・河鎮龍(富山県立大学)、真野浩行（土木研究所）、永田貴丸（琵琶湖環境科学研究センター）
P-59	琵琶湖の透明度に対する植物プランクトン濃度の影響の経年変化：2010～2012年の3年間の比較 石川俊之・藤川和寛（滋賀大学）
P-60	G P Sを装着した漂流ブイによる湖流観測の試行 石川俊之・桑原崇・鄔倩倩・浅井恵美（滋賀大学）
P-61	霞ヶ浦底質を用いた溶出試験および微生物叢解析 *對馬育夫・柴山慶行・岡本誠一郎（土木研究所）
P-62	湖沼における細菌群集の種構成の変化 竹内梨菜・日野修次（山形大学）
P-63	水質の違いによる金属形態とミジンコへの毒性の関係 河鎮龍（富山県立大学）、加茂将史（産業技術総合研究所）、永井孝志（農業環境技術研究所）、坂本正樹（富山県立大学）
P-64	湖沼の水質について *吉尾卓宏，小日向寿夫，桑名美恵子，相崎守弘（茨城県霞ヶ浦環境科学センター）